ワークショップ『日本の大学におけるロシア語教育の現状と課題』

ロシア語教育研究会

大学の外国語教育全体が非常に厳しい状況におかれている今日、大学における外国語教育とは何か、何を目標とし、その目標に向かって具体的にどのような教育を行なっていくべきなのか、様々な角度からの見直しが急務であると思われる。本ワークショップでは、ロシア語教育研究会が専門外ロシア語教育の現状を把握するために2001年1月に実施した「『専門外ロシア語教育』の現状に関するアンケート」調査の結果を報告するとともに、そのアンケート調査結果の分析、及び、大学教育改革の中でロシア語教育が抱える制度上の問題点や、現状の授業のあり方の分析を通し、ロシア語教育の向かうべき一つの方向性の例として、「授業内容の明確化」と「具体的な授業目標の設定」を提案した。

尚、今回のワークショップは、円卓会議の形で行われ、フロアでは活発な意見交換がなされた。

また、忙しい中、アンケートに回答頂いた方にこの紙面を借りて御礼申し上げたい。

「ロシア語教育改善のための『専門外ロシア語教育』の現状に関するアンケート」集計結果と分析

林田理恵（大阪外大）

データ処理・分析 伊藤美和子、加藤純子、杉谷直明、高島尚生、横井幸子（以上 大阪外大院）、青木則子（神戸外大院）、林田理恵（大阪外大）

アンケート調査からは、研究会が作成したアンケートにはおさまりにきらないほどの授業形式の多様性や、現場の教師の苦悩と努力がうかがえる。

1. 調査結果から

- ◎半数以上の現場で大学としての外国語教育のコンセプトが不明確 「ない」、「知らない」→56%
- ◎〈初級文法・教養としての外国語〉〈ロシアへの関心〉〈日常会話〉— 並立される3大授業目標
- ◎多様化する実際の授業目標 5つ以上の選択肢を選

んだ回答者の割合 76.6%

- ◎「初級文法の習得」「挨拶・自己紹介ができるようになる」→実際の授業目標として選択した教員の約3割が本来的目標とはしない

	実際の授業 目標とする	本来的な授 業目標とする	
「初級文法の習得」	79人	59人	-20
「挨拶・自己紹介ができるようにする」	50人	36人	-14
「ロシアに興味をもたせる」	68人	61人	-7
「教養としての外国語の知識の獲得」	58人	51人	-7
「異文化理解のきっかけを与える」	50人	57人	+7

- ◎単なる「ロシア事情」ではない「異文化理解」の視点確立の必要性の指摘

- ◎「授業目標が達成されていない」→約半数の教員が指摘（51.7%）

理由として「時間数不足」77.8%

「学生のモチベーションの低さ」53.3%

2. 現状の問題点

- ◎多くの大学が外国語科目についての明確なコンセプトを持たないまま、「大綱化」以降、枠組のみのカリキュラム改変を行い、セメスター制の導入も含めて、結果的に時間数不足がより進行し、また複数年次にわたる継続的なカリキュラム設定も不可能となっている。

- ◎教員側の意図として、「地域学・異文化理解の一環としてのロシア語の授業」、「コミュニケーション能力養成のための授業」を実施すべき、ということが近年の傾向として今回のアンケートの調査結果にも顕著に現れているが、上記のような劣悪化する教育条件下でこのような意図が活かさない現実がある。

- ◎現場での各教員の様々な工夫と苦労が多様化した目標設定に現れているが、平均的には、「初級文法の獲得」を中心に、機会があればロシア事情に触れ、また「挨拶・自己紹介」程度の簡単な会話練習を試みる、という授業が行なわれている。このような授

業内容について不本意であると感じている教員も少なくないが、各項目を整合的に一体化させるようなコースデザインを開発するまでには到っていない場合が多い。

- ◎授業目標が達成されない理由として、回答者の6割が「受講生の動機・意欲不足」を挙げているが、「実践的な語学能力の習得」を目指す受講生のニーズ (cf. 武藤・梶川 1999: 206 「日本の大学におけるロシア語教育の現状に関する調査研究 (V)」『京都外国語大学 研究論叢 LII』) に、上記のような制約された条件下での授業内容が対応しきれていないことから、受講生の意欲を引き出すことができないという事情もあると思われる。また、継続性のない単年度の履修形態も、このような事情に拍車をかけていると言えるであろう。

3. 今後の方向性

外国語科目の必修の撤廃、科目履修制度の拡充・生涯教育・社会人教育の充実 (キャリアディベロップメントの一環としての受講)、大学間の相互乗り入れと単位互換制度の制定、語学センター構想といったことがより進む中で、これまでの安易な単位取得のみを目的とする履修から、具体的なモチベーションをもち、修了時の明確な技能取得をめざす受講生の履修へと変っていくことが予測される。

4. ロシア語教育の向かうべき方向性

- 明確なコンセプトを持ったロシア語教育の新しいモデル (目標, 内容, 方法, システム) の確立の必要性
- 異文化理解を基盤とする異文化インターアクション能力としての「ロシア語コミュニケーション能力」の養成に向け、各現場の条件に応じた具体的なコース・デザイン作成の必要性
- ロシア語教育の新しいモデル確立のための専門研究者の養成

「専門外ロシア語教育の授業の定義と明確化 — ロシア語教育の新しいコンセプトの確立 と具体的なコースデザイン作成に向けての ロシア語能力検定試験利用の試み —」

武藤研介 (京都外大) 三浦由香利 (神戸外大非)
北岡千夏 (大阪外大非)

平成3年の大学設置基準の改正以降、わが国では、

高等教育の改革が進められている。設置基準の大綱化を承けた各大学は、特色ある教育課程の編成に乗り出し、平成8年度までに9割以上の大学で何らかの教育課程改革が実施されている。この改革の流れの中、外国語科目の再編が行われてきた。2001年現在、18歳人口の減少と進学率の上昇 (50%を超える進学率)、学生の学力低下、大学の定員割れといった現実に対応すべく、大学教育改革の動きはさらに激しさを増しており、FD (教育能力改善) 活動が大学で活発に行われるなど、教育内容・方法の改善が改革の重要なテーマになっている。

大学のロシア語教育もこの大学教育の変革の動きの影響を大きく受け、教育過程の再編成による「ロシア語」科目の廃止・削減への動き、セメスター制による「外国語」科目全体の量的削減という現実とともに、自己点検評価の導入による「ロシア語」科目への質的要求もあり、「ロシア語」の授業の再考、教育の目標設定の必要性が我々にとっての焦眉の課題となっている。しかし、このように授業時間数が削減される現状の中、ロシア語の習得を目的とした「ロシア語」という科目の設定が果たして可能なのであろうか。

現状の大学における語学教育の現場で、「話す」「聞く」「読む」「書く」という総合的言語活動を目標とした授業がどこまで可能であるか。それををはかる目的で、「外国人のためのロシア語能力検定試験」—— Типовые тесты по русскому языку как иностранному —— (1998年1月、ロシア教育省内に設立されたシステム開発委員会によって、ロシアの大学に入学を希望する外国人の語学能力検定のため開発、作成された) の実施を試みた。本ワークショップの報告では、そのデータを通して、経験論ではなく数値的に明らかになった問題点を指摘し、そこから、コースデザインをたてて授業を行うことの重要性についての見解を導き出した。